

論文要約

軍記物語に描き出された武士像

—『平家物語』と『太平記』における—

広島大学大学院教育学研究科
博士課程後期 文化教育開発専攻

于 君

D 1 3 4 3 4 7

序章

本論文は、日本における「武士像」成立の姿を、中世の軍記物語に探るものである。数多くある中世の軍記物語中、後代の戦争物語の表現、文学、社会の諸局面にきわめて大きな影響を与えた『平家物語』と、『平家物語』から影響を受けつつ、それとはまた異なる物語を作り出した『太平記』とは、共に後代の軍記物語に大きな影響を及ぼした最重要の物語である。本論文では、この『平家物語』と『太平記』を題材に、そこに描き出された「武士像」を明らかにする。

両物語中の武士については、八十年代以降、政治思想史、倫理思想史、社会思想史からの論及が多く見られるようになった。それらは、主として武士の戦場倫理・気質・精神・意識・行動規範について考察し、特に「名」を重んじ、死の覚悟を持つ武士の特徴を両軍記物語から検証したと言える。また、「名」以外に、多くの研究者が指摘したように、「忠」や「孝」等の概念も、物語中の武士像を明らかにする上で重要な要素となる。

本論文では、両物語中の武士に関わる記述に着目して考察する方法をとる。特に語りの中に現われる「名」、「忠」、「孝」、「恩」といった象徴的な言葉の表出の生の姿から、そしてまた、そうした儒教的（仏教的）用語には整理し切れない特有の表現そのものから、武士の姿を読み解くことを目的とする。

第一章 『平家物語』における武士の「名」

第一章では、戦闘場面に出てくる「名」または「名」と関わる言葉に着目し、それがいかなる状況において、武士の行動に影響を与える要素として語られたかを具体的に究明し、当時における「名」の意味を明らかにする。

『平家物語』には「名」を求める武士の姿が、必死な先陣争い、立派な討死、壮絶な自害といった姿で表出されている。武士の「名」が生きた言葉としてどんな意味を有していたのかについて、まず『平家物語』研究史において、武士の「名」についての言及を押さえた上で、先行研究をふまえつつ、『平家物語』に多出する「名」の言葉のあらわれ方に関して、具体的文脈のなかから「名」の内実、意味について検討した。

『平家物語』中の武士は、敵を討つ前に「名乗る」ことが求められた。それは言葉に表わされ、合戦場面で互いを対等の者として確認し合い、自らが相手にふさわしいものとして確認される姓名・身分のことであった。「名乗」が戦場で認められる一方、死に至るまであえて名乗らなかつた武士もいる。「…存ずるむねがあれば名のるまじいぞ」と言い、討たれるまで名乗らなかつた斎藤実盛がその典型例である。ここで語られたのは、かつて戦から逃げたという一点の「恥」があった「実盛」という「名」を隠すことで、再び「命を惜しまぬ」武士という評判としての「名」の回復であった。先陣を取った武士は、「名」が合

戦日記に記録され「恩賞」にあずかるのに対し、先陣争いに失敗した武士は「恩賞」も「名」を得られない。しかしながら、「名」を得る手段として、「立派な討死」という道筋もあった。そうした場面において武士が追求したのは、河原太郎・次郎兄弟が決死の一番乗りを試みた場面で語られるように、「剛の者、一人当千の兵」という評判としての「名」であった。

相良亨は武士が重んじる「名」の精神構造を分析し、「武士がその名・恥を問題にする時、彼は一個の武士としてあった」と述べている。と同時に、時に主従関係のみでは説明がつかない武士の行動があることを指摘する。相良の議論をふまえ、武士が「名」を求める多様な姿を、武士の主従関係、「家」との関係においても考察した。その結果、武士の「名」への追求が主従関係において語られる際、武士はより高い評判としての「名」を獲得したことが分かった。そして、武士が追求した「名」は、一個人としての「名」であると同時に、昔から「実力」によって築き上げてきた「家」の名でもあったのである。

ところで、『平家物語』中、平家方の武士について、平知盛の例に見られるように、彼は「名」を重んじつつも、仏教信仰（無常観）に伴われ、運命に対して従順であった。これは、坂東武者に見られない平家方の武士の特徴として理解することができであろう。

以上、『平家物語』における武士像を構成する重要な要素の一つが、「名」という言葉であったことが明らかになった。

第二章 『平家物語』における武士の「孝」と「忠」

第二章では、『平家物語』における武士の「孝」と「忠」について論じる。『平家物語』中、明確に「孝」と「忠」という言葉が武士に関して現われるのは、平重盛が登場してからの場面においてである。

重盛は平家一門の対面を思慮し、「名を揚げて、父母を顕彰する」ことを子へ教訓し、主君後白河院を軟禁しようとする父平清盛に対しても、一族の繁栄を考えた上で諫言という形で応対する。こうした彼の「孝」は、儒教的要素が強いように見えるが、後に出家して父に先立って死んだ重盛には、儒教の説く「孝」と相容れない側面も見られる。出家することと親に先立つということは、儒教の「孝」において大不孝とされることからだからである。しかし、このことについて、『平家物語』では特に問題視されていない。『平家物語』を彩った思想は儒教だけではないからである。仏教思想の受容が、当時の人々の死生観に与えた影響の大きさは無視できない。このことについて、祇王と藤原成経の場面を取り上げ、重盛の「孝」と対照させながら、「孝」の相異なる表われ方を検証した。その結果、儒教の「孝」思想が仏教儀礼と関わり合いながら、当時の人々の意識の中に共有されていたことが明らかになった。

朝廷の「臣」としての重盛が抱いた「忠」は、主君後白河院、そして天下に対してであった。その「忠」が、父清盛と対立の場面で初めて「孝」と矛盾を来してくる。この重盛に見られる「忠」が、『平家物語』中、それ以外の場面で見られない理由を、『平家物語』のテキスト全体における重盛の位置づけから考察した。

以上、『平家物語』において、「孝」と「忠」はもっぱら平重盛が登場する場面において語られ、その「孝」と「忠」は、重盛の「諫言」においてその威力を発揮し、物語の主題・構想に関わる要素となった。『平家物語』において重盛は、特別、かつ「理想的な武士」として描き出されたのである。

第三章 『平家物語』における武士間の「つながり」

『平家物語』では、「生死の関頭に立つ場面」で武士の言行に現れる情誼的な心のかよ合いが多く示されている。津田左右吉は、『平家物語』における武士間の多様な心のかよわせ方を、「武士の情」という用語で説明した。それに対して第三章では、そうした武士間に見られる情愛的な心情の表出を、仮に武士間の「つながり」と定義して、その諸相を明らかにする。

そこでは具体的に、主従間、兄弟間、敵との間、父子間という四つの関係からそのあり方を考察した。『平家物語』の中で、武士の主従間の「つながり」について、義仲と今井に見られるような、主人と乳母子の関係は特に濃密なものであった。そこには情誼的結合としての相互への思い入れが見られる。これは同志的紐帯の如きものとして、特に源氏側の武士の主従関係において顕著に表わされている。兄弟間においても、河原太郎・次郎兄弟の挿話が語るように、危険な戦場で討死しようとする兄をひとり置き去りにはできず、共に討ち死にする心情からは、兄弟間の深い「つながり」が見えてくる。また、敵との関係において、熊谷直実の「敵」平敦盛への心情は、本来武士の心底に潜んでいた「なさけ、慈悲」が、特別な場面で初めて自然な情として現れ出てきたのである。父子関係において、親である武士のこのような思いは時に武士の職務との矛盾も露呈させるが、父の子への愛は、その生きる根拠としての第一番目の心情であり、それは時に名誉よりも大事とされる場合もあったのである。

前二章に加えて、本章で考察したように、必ずしも概念的な言葉は用いられないが、武士と武士との「つながり」の姿が、「生死の関頭に立つ」場面において、人間同士の暖かな感情や愛、人を思いやる優しい気持ちや心情として、物語中に描き出されているのである。それもまた、『平家物語』が語ろうとした、もう一つの武士像であった。

第四章 『太平記』における武士の「忠」と「孝」

第四章、第五章では、中世を代表するもう一つの軍記物語『太平記』をとりあげ、その中に描き出された武士像を明らかにする。

『太平記』中、楠木正成・正行父子は、「忠臣」「忠孝」を代表する武士として長い間人々の脳裏に深く根付いてきた。そうした正成・正行像定着の理由としては、『太平記』中の正成・正行関連の記述に起因するほか、戦前までの『太平記』受容史が深く関わってきた。本章では、戦前・戦中期に偏った視点でとり上げられた楠木父子ら南朝側の武士に限らず、また限定的な「君臣関係」の枠組にもとらわれず、数十年にわたる南北朝の内乱を主題とした『太平記』に描かれたさまざまな武士における、「忠」「孝」に関わる具体的な記述にも着目して、多様な武士の姿について考えることとする。

本章では、第二章で明らかにした『平家物語』の「忠臣孝子」像を再考・整理した上で、まずは周知の「忠孝」の武士として、楠木正成・正行父子を取り上げて考察し、その次に、楠木正成・正行以外の武士について考察を加えた。その結果、楠木正成・正行父子の場合に見られる、南朝の天皇とその臣下の「君臣関係」における「忠」に止まらず、塩飽入道聖円・石塔右馬頭頼房らとそれぞれの「主」との主従関係に表出される「忠」（忠義）、さらに、北朝天皇と細川清氏の君臣関係における「忠」のごとく、『太平記』中の「忠」の対象はさまざまであり、また「忠」の姿も、南朝天皇に終始仕えて「臣」としての節を全うして行動する中、各々の「主」に二心無きことを示すためになされる討死・自害、北朝天皇の辛苦を思いやる心から起った行為など、実に多様な形で表出されていることが判明した。

一方、「孝」に関して言えば、父の遺言と母の教訓を守り、長い年月をかけて父の遺志を貫いた楠木正行の「孝」と、子孫の繁栄をも背後にし、亡き父のあの世の道連れになろうと討死した資忠の「孝」の、二つの「孝」の姿が『太平記』には表わされている。

そしてこの正行と資忠に見られる二つの「孝」が、ともに「忠」と連動して表出されていることにも注目すべきである。正行の「孝」は、父の遺志を継いで南朝側二代の天皇に「忠」を果たしたことが前提とされている。一方、無き父のあの世の「孝行」を尽くすため討死した資忠に対し、『太平記』は、彼を「ためしなき忠孝の勇士」と記している。『平家物語』における平重盛の場合、父と主君の対立という背景の下、「孝」と「忠」は二律背反する形で情感を込めて語り出されていた。しかし、『太平記』における正行と資忠の二場面には、「孝」と「忠」の対立といったモチーフは見いだせない。『太平記』において、『平家物語』とは異なり、武士の「孝」と「忠」の一貫したつながり、連続が強く表出されるに到っているのである。

また「忠」と「孝」の序列に関しても、〈貴族的〉色合いを帯びた武士、平重盛に代表さ

れる、『平家物語』の「忠臣孝子」像が、究極的には「孝」につながる「諫言」において語られたのに対し、『太平記』では多くの場合、武士の本分である戦の場面、実に多様な「忠」と「孝」を二つながら実践する武士の生々しい姿が描き出されていることが明らかになった。

第五章 『太平記』における武士の「恩」

『太平記』には、『平家物語』ではそれほど重要でなかったもの、『太平記』において重要な意味が与えられるまた別の概念が存する。それは、「恩」という概念である。第五章では、武士を描く場面に多出する「恩」と関わる多様な表現に注目して、その意味について考えた。

実はこれまでの研究において、「恩」で武士を捉えた思想的言及はほとんどなされていない。ほとんど唯一と言っていい研究は、「恩」を武士階級の主従関係に基づいて成立した社会意識（主従関係意識）として捉えた桜井庄太郎の論である。古くから日本に存在してきた「恩」概念が、特に強く意識され始めたのは中世になってからである。それは主として中世期の武士における、「奉公」と対をなす「御恩」という概念としてであった。『平家物語』と『太平記』が成立した年代は、この御恩と奉公の主従関係が成り立った時代、そして、それが戦国期に向けて変容してゆく過程と重なる。では、中世の武士の物語において「恩」はいかに語られたのか。本論では、まず先行する軍記物語『平家物語』における武士の「恩」について触れ、次に、『太平記』本文の武士の「恩」が語られる具体的な文脈に即して検証する。

『平家物語』で「恩」が最も象徴的に現れるのは、平重盛が父清盛を諫める場面である。その場面において、重盛が強く主張している「朝恩」「君の御恩」は、後白河院を幽閉しようとする父清盛の行動が天皇に対する不忠であることを教え諭す効果として表現されており、それは、教訓的な文脈上の「恩」以上のものではなかった。「恩」の実践やその具体相が必ずしも明示されない「恩」、観念的な意味合いの強い「恩」であったと言える。一方、実際の行動で故池殿の「御恩」に報いた源頼朝の例があるが、『平家物語』には、そうした例はこれのみであった。

『太平記』は、武士の死をくりかえし描き出している。『太平記』中の武士のあり方は、その生き死にの場面においてこそ表出されており、そこに当時の武士像が端的に示されていると考えられる。そして「恩」も、この武士の「生き死に」の場面で多く登場するのである。本章では、『太平記』における武士の「恩」について、「討死」と「自害」、及び「変心」の場面から考察した。

人見四郎と金沢貞将の討死や塩飽忠頼の自害の場面で語られる「武恩」「一日の恩」「御

「恩」は、いずれも北条幕府（北条執権高時）との主従関係における「恩」の表現であった。一方、北条仲時の自害に見られる「芳恩」は、主従関係より、軍勢の仲間同士（≡同輩）の関係において語られる「恩」の表現であった。さらに、伊東大和次郎、安倍野の合戦で助けられた武士たちが「変心」する場面では、敵との関係において「恩」が語られる。また、宗繁が「変心」する場面で語られる「重恩」は、武士の主従関係の場面において、あるべき行動規範をとらなかつた武士を批判する際に特別に選ばれた「恩」の表現であった。生き死にの具体相の異なりを超えて、動機としての「恩」が重視されたことが、ここから指摘できる。

以上、『太平記』において、武士の生き死にの具体的場面で、「恩」の意識がいかに重要な要素としてあつたかを明らかにした。そして、もっぱら「忠」で語られてきた楠木正成・正行父子ら名だたる武士以外に、これまであまり議論されてこなかつた武士たちの生き死にの場面において、「報恩」する武士の姿が、武士像の一つの姿として、『太平記』には表出されていることを明らかにした。

終章

終章は、軍記物語にいかなる武士像が描き出されたのかについて、総合的に考察したものである。

その成立時期を百三十年ほど隔てた『平家物語』と『太平記』には、武士の共通する姿が描き出される一方、相異なる武士像も表出されている。共通して両作品に描き出されていたのが「名」を惜しむ武士の姿である。『太平記』の記述が『平家物語』の影響を受けたことについては既に多くの研究者に指摘される通りである。実際に、『太平記』が斎藤兄弟の渡河を語る場面で、『平家物語』における斎藤実盛の話をふまえて、その「名」を惜しむ姿を語っている。『平家物語』が描き出した「名」を重んじる武士の姿が、そのまま一つの武士の「規範」として『太平記』に継承されていった一つの例として考えることができるであろう。そして、後世の武士論で「名」（名誉）が取り上げられる由縁を生み出す一端を担ったものとして、『平家物語』と『太平記』における「名」の叙述があつたことが指摘できるであろう。

一方、同じ「忠」と「孝」で語られた両作品の武士像の大きな違いとして、一人の理想的な武士に代表される「忠臣孝子」像（『平家物語』）に対し、実に数多くの「忠」「孝」の武士が描き出されたのが『太平記』である。この違いは、両作品における武士の主従関係そのものの異なるあり方に由来する時代背景も当然あるが、本章では両作品の主題・構想との関連から論じた。

さらに、生死に際した場面において、両作品が典型的に描き出した異なる武士像がある。

『平家物語』では、人間としての温かい感情や愛でつながる武士像が描き出されたのに対し、『太平記』には「報恩」する武士の姿が特徴的に描き出されている。こうした、両作品における異なる武士像の背景には、宗教思想との関連も考えられるだろう。同じく敵との関係において描かれた武士の場面を例にとると、『平家物語』の熊谷直実が敵である平敦盛に「なさけ」をかけた場面では、殺生を罪とする仏教思想による反省の情が見出され、熊谷の仏門に入る志を促したと記述される。それに対し、『太平記』における楠木正行が敵に「なさけ」をかけた場面には、そうした仏教的要素は一切見られない。ここでは、「なさけ」ある正行よりも、むしろ戦のさなかで正行からうけた「なさけ」を現実的な「恩」と捉え、報恩して死んでいった武士の方が特化して語り出されているのである。『平家物語』の背景に底流として在ったのが仏教思想であったのに対し、『太平記』には、儒教的道義論と仏教的因果論とが併存し、仏教的因果論によって儒教的道義論が補強される関係にあったと言える。両作品における武士の描かれ方の違いを、作品の背景にある宗教思想の異なりや、その平安末期から中世にかけての多様な変容に即してさらに考える必要があるだろう。

以上、「名」を重んじる武士像、「忠孝心」ある武士像、武士間の「つながり」を大事にして温かい愛情を持つ武士像、そして「報恩」する武士像、といった多様な武士像が中世の二大軍記物語に描き出されたことが、本研究において明らかになった。それら、中世における武士像を構築した言葉（要素）の多くが、後に、武士の倫理や道徳規範などを体系化して論じた近世以降の武士論（武士道論）の内実を形造っていった部分は当然であるだろう。他方、第三章で考察した武士間の「つながり」を大事にする武士像が、津田の研究において「情」と再定義されたように、中世における武士が、研究者の異なる視点によって、絶えず解釈し直されてきた事実も存する。本論で考察した中世の二つの軍記物語の武士については、近世期以降も多くの解説・再解釈が行われてきた。そうした絶えざる再解釈の中から、何が選びとられ、何が捨象されて、近世の武士道、そして今日私たちが抱く武士像が形成されたかについて、本研究の成果を基にさらに検討を加えていくことが次の課題となるだろう。